

シミュレーション教育に参加した 卒業生の学びの内容

阿部 祝子・前原 澄子
梶谷 佳子・磯見 智恵
奥野 信行・中橋 苗代
穴吹 浩子・マルティネス真喜子
小森 富美江・鈴木 久義
久松 志保・判 澤 恵
岩山 朋裕・上山 晃太郎

1. はじめに

本学部では、2012年3月に4期生を輩出した。1期生は4年目の看護職となり、プリセプターとして新人看護職の職場適応を促がす役割を担い、チームリーダーも任せられるようになる時期である。基礎教育卒業後の看護職は、就業病院の新人看護職研修プログラムやOJT (On the Job Training)を通して、看護実践力を習得していく。しかし、臨床において医療者に要請されるのは、複雑で高度な医療を必要とする対象への確実な実践力である。その実践力育成のために注目されているのが、シミュレーション教育である。それを提供するために、Skills Labが大学病院等に設置され、研修医、新人看護師等の教育の場として活用され始めている。シミュレーション教育は新しい教育方法で、専門学会や著作物で多くの取り組みが紹介されている。^{1,3)}しかし、看護職の実践力向上を目的とした体系的で効果的な学習プログラムや評価については未だ示されていない。⁴⁾

本学では、2011年度に1～3期の全卒業生を対象に学習ニーズの調査を実施した。その結果、状態急変時の対応、重症患者への医療行為に関わる看護技術など、経験の機会の少ない、あるいは専門的で実践的な看護技術を習得したい

というニーズが多かった。これらは、本学が有するシミュレータを活用した実践的な看護技術の学習機会の提供になると考え、『Skills Lab 研修』を企画し試行した。そこで本研究では、7回の学習プログラムに参加した卒業生の学びの内容を把握し、学習プログラムの評価の一助とするとともに、今後本格的な研修企画にむけた課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 研究対象

本学看護学部卒業生(1～4期生)で『Skills Lab 研修』に参加し、研究協力で同意を得た者とした。

2) 調査期間

2012年6月23日～2013年2月16日

『Skills Lab 研修』の学習プログラム及び学習目標は、表1の通りである。

3) 調査方法

質問紙法により調査した。調査対象は、看護職として就業している卒業生であるため、研修では自己の看護実践をもとに各自の学習ニーズに応じた学習がなされていると考えられる。したがって、質問内容は、参加した研修において、「あっ、そうか」、「なるほど、わかった!」と思った具体的な場面についての自由記載とした。また、自由記載の内容を客観的に分析するために、テキストマイニング手法(Trend Search 2008)を用いた。この手法は、テキストを形態素解析により品詞分解し、重要度や関連度を計算するキーワードアソシエーション分析を行う。キーワードの重要度はその出現頻度とばらつきで、関連度は文書中に同時に出現する確率から計算される。キーワード間の関連性をシミュレーションしマッピングすることによって、直感的に把握できる。キーワードの適正なマッピング(配置)を求めるために、スプリングモデルシミュレーションを用いて、キーワード間の関連性の物理モデルをバネ(スプリング)の強さにみたてている。すべてのキーワードは、強いバネに引っ張られ、すべてのバネ

表1 2012年度 Skills Lab 研修の学習プログラムと学習目標

回	開催日	テーマ	学習目標
1	6月23日 (土)	人工呼吸器の管理、 気管内挿管の準備・ 介助、意識レベルの 把握	意識レベルの確認方法および評価が習得できる。 気管挿管に関連した身体の構造と機能について述べるができる。 気管挿管の目的および適応について述べるができる。 気管挿管の準備と介助の手順とその根拠を理解して実践できる。 人工呼吸器の使用目的・患者への影響を理解できる。 人工呼吸器の基本的な構造・設定・モードとその意味が理解できる。 人工呼吸器管理下の患者の観察ポイントが理解できる。 人工呼吸器のアラーム・トラブルへの対処方法を理解できる。
2	7月21日 (土)	心電図モニター・12 誘導心電図の装着・ 管理、胸部圧迫法	心電図をドクター含め、他者に正しく表現し、報告できる。
3	9月15日 (土)	中心静脈内注射の管 理	中心静脈カテーテル挿入の目的・適応、構造、挿入経路、合併症、管理を理解できる。 中心静脈ポートの目的・適応、管理を理解できる。
4	10月20日 (土)	急変時の徴候・症状 のアセスメントとそ の対応	急変時の徴候・症状を理解し観察できる。 急変時の徴候・症状のアセスメントをもとにした適切な対応を理解できる。 急変時のチームメンバーの合理的な協力による蘇生対応の必要性を理解できる。
5	11月17日 (土)	手術後の異常徴候・ 症状のアセスメント とその対応	手術・麻酔による身体侵襲について理解し観察できる。 手術後の全身状態を観察し、異常の早期発見ができる。 対象者の全身状態の変化を捉え、適切な対処ができる。 手術後異常発生時のチームメンバーの合理的な協力による対応を理解できる。
6	12月15日 (土)	慢性疾患(COPD)急性 増悪時の徴候・症状 のアセスメントと その対応	慢性閉塞性肺疾患(COPD)の病態・治療について理解できる。 慢性閉塞性肺疾患(COPD)の急性増悪に伴う徴候・症状を観察・アセスメントし、看護ケアの方向性を導くことができる。
7	2月16日 (土)	創傷(褥瘡)処置、ス トマケア、瘻孔管理	ストマケア及びスキンケアの基本を理解できる。 創傷ケアの基本を理解できる。

の引力が釣り合う位置に配置される。その結果、関連性の強いキーワード同士が近くに配置される。関係線に対応するスプリングの性質(自然長と強さ)の決め方について、【スプリング(R-R)】のレイアウトを用いた。これは、関係線に対応するスプリングの自然長を、関連度の逆数にすることにより、スプリングの強さは関係線の関連度と等しくなり、関連度の大きさに応じてスプリングが短く、かつ強さが増し、各ノード間の距離が近くに保たれ、キーワード群

のクラスタが形成される。図1は第1回研修のコンセプトマップである。最大の重要度のキーワードは濃い枠から、最小の重要度のキーワードを薄い枠のノードで示され、最大の重要度の関係線は太い線から、最小の重要度の関係線を細い線で示される。また、関連テキストは、キーワードを含む元文書(テキスト)のことで、キーワードとテキストの関連性を分析することができる。このようなコンセプトマップをもとに、重要キーワードで作成されたクラスタを中心に、そのキーワードの関連テキストを検索表示し、その意味内容を解釈して学習内容を分析した。図2は第1回研修の重要キーワードの関連テキストの例である。なお、「ある」、「する」などの自動詞、助詞、関連キーワードとして抽出された単語で意味がわからないものは削除して分析した。

4) 倫理的配慮

受講者に、研究の趣旨及び内容、具体的には、研究協力者の個人情報及び秘

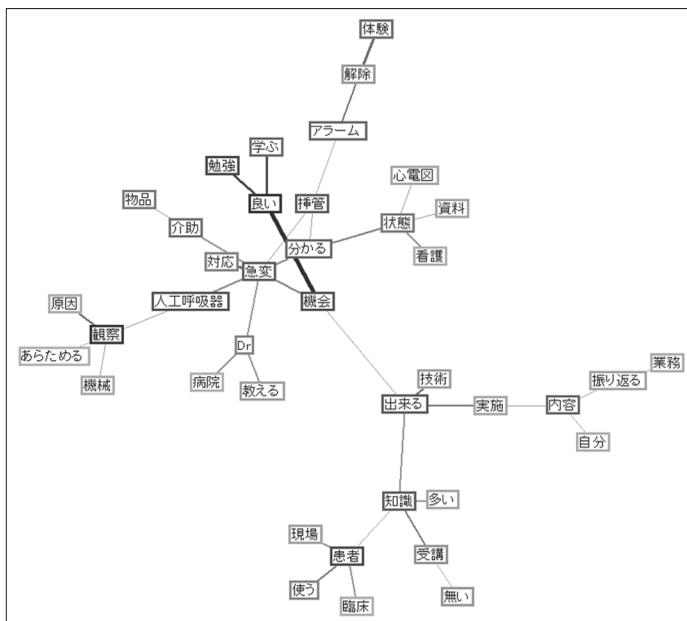


図1 第1回コンセプトマップ



図2 第1回の重要キーワード「良い」の関連テキスト

密の保持、個人の尊厳と個人の自由意思の尊重、研究協力者からの質問や研究結果の開示の依頼への対応、研究協力での負担への配慮などについて文書及び口頭で説明し、同意を得た。また、本研究は、本学研究倫理委員会の承認(承認番号第12-02号)を得て実施した。

3. 結果

1) 各回の受講者と質問紙回収数

各回の受講者数と質問紙回収数を表2に示す。

表2 Skills Labの研修プログラム受講者数と質問紙回収数

回	受講者数(人)	質問紙回収数	回	受講者数(人)	質問紙回収数
1	25	17	5	16	16
2	32	32	6	16	16
3	20	17	7	12	12
4	20	17			

2) 各回の記載内容のキーワード

各回の記載内容について、重要度の高いキーワードを上位5位まで示したが、表3である。

表3 各回の記載内容の重要キーワード(上位5位)

回	キーワード	重要度	出現頻度	回	キーワード	重要度	出現頻度
1	良い	1.045	8	5	アセスメント	1.345	20
	観察	0.900	16		出来る	0.808	6
	勉強	0.794	9		Moore分類	0.639	2
	患者	0.781	18		観察	0.616	6
	機会	0.743	7		再確認	0.588	2
2	心電図	1.724	23	6	勉強	0.928	4
	良い	1.181	24		分かり易い	0.778	3
	出来る	1.165	22		アセスメント	0.699	11
	波形	1.113	7		起こる	0.675	3
	学習	1.041	8		観察	0.603	4
3	分かる	0.917	14	7	根拠	0.881	6
	手技	0.899	7		注意点	0.705	3
	挿入	0.783	16		良い	0.671	6
	医師	0.719	12		処置	0.544	5
	介助	0.708	16		装具	0.541	5
4	アセスメント	0.816	13				
	患者	0.796	5				
	良い	0.661	8				
	声かけ	0.656	3				
	出来る	0.610	16				

3) 各回のコンセプトマップ

(1) 第1回：人工呼吸器の管理、気管内挿管の準備・介助、意識レベルの把握

重要キーワードは、表3のように、「良い」、「観察」、「勉強」、「患者」、「機会」の順に抽出された。図1のコンセプトマップでは、「急変」、「観察」、「知識」、「患者」というキーワードについて、それぞれクラスタが形成された。これらのキーワードの関連テキストをみると、[臨場感があるリアルな中で実際に学ぶことができた]、[手技に集中し観察やアセスメントが不足していた]、[一から具体的に教えてもらえた]、[自分の実践を振り返ることができた]、

[分からない不安が少し緩和した]、[技術の練習になった]、[実際の場面でなくてよかった]、[慣れた業務で向上心がなかったが意識が変わった]などが書かれていた。以下、キーワードを「 」、関連テキストを「 」で示す。

(2) 第2回：心電図モニター・12誘導心電図の装着・管理、胸部圧迫法

重要キーワードは、表3のように、「心電図」、「良い」、「出来る」、「波形」、「学習」の順に抽出された。図3のコンセプトマップでは、「心電図」、「知識」、「できる」というキーワードについて、それぞれにクラスタが形成され、「学習」というキーワードでこれらのキーワードを結びつけていた。これらのキーワードの関連テキストをみると、[心電図波形の意味について、なるほどと思った]、[自分の実践を振り返ることができた]、[今更聞けないことや自己学習ではわからなかったこと、基本が理解できた]、[新しい情報(ガイドラインの改訂)を教えてくれた]、[知識と実践の両面から学べてよかった]、[自分に何ができるのか、どうすべきかを考える良い機会になった]、[他グループを見て学

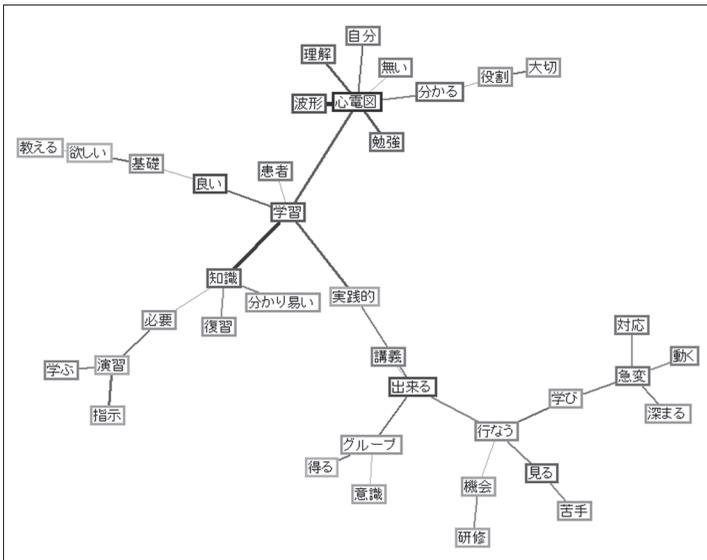


図3 第2回コンセプトマップ

ぶことができた]、[現場から離れたとても良い時間だった]、[リーダーとして自分の行動の課題が明らかになった]、[よりそう看護をしていきたい]などが書かれていた。

(3) 第3回：中心静脈内注射の管理

重要キーワードは、表3のように、「分かる」、「手技」、「挿入」、「医師」、「介助」の順に抽出された。図4のコンセプトマップでは、「挿入」、「分かる」というキーワードについて、それぞれクラスタが形成され、両方を「観察」というキーワードが結びつけていた。これらのキーワードの関連テキストをみると、[CV挿入の手順は何となくわかっていたが、医師役をすることでスムーズな挿入のための介助がわかった]、[CVの構造、挿入過程がわかったので、患者の説明にいかす]、[自分の介助の振り返りができた]、[患者の処置

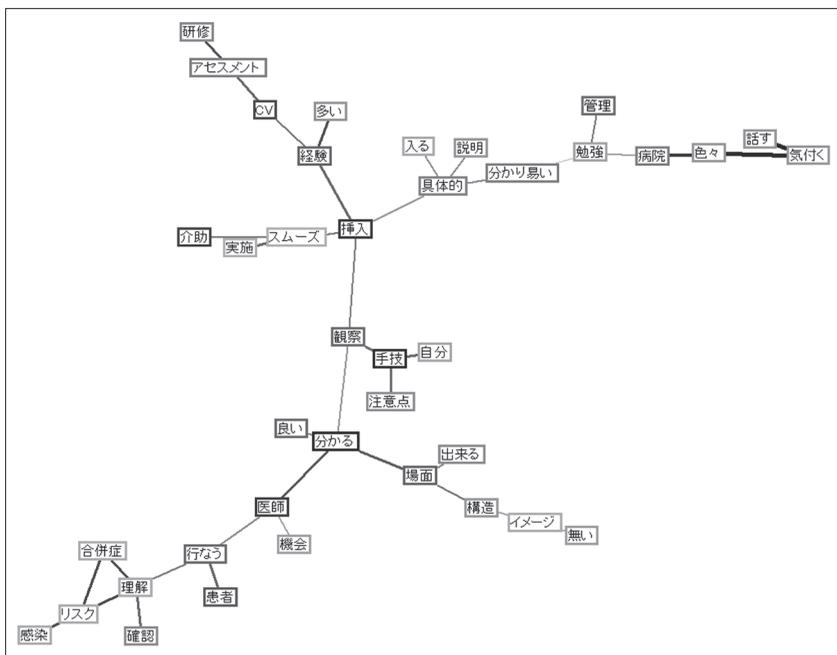


図4 第3回コンセプトマップ

に対する不安や怖さを軽減できる関わりをしたい]、[臨床では説明を受けながら介助見学の機会がなく、良い体験ができた]、[CVを挿入している患者の観察、管理の具体的なイメージができた]などが書かれていた。

(4) 第4回：急変時の徴候・症状のアセスメントとその対応

重要キーワードは、表3のように、「アセスメント」、「患者」、「良い」、「声かけ」、「出来る」の順に抽出された。図5のコンセプトマップでは、「患者」というキーワードを中心に、「臨床」、「経験」、「不足」というキーワードに関するクラスタが形成された。これらのキーワードの関連テキストをみると、[処置に必死で、観察やアセスメントが不足していた]、[1つ1つの処置、行動について根拠をもって行う必要があることを学んだ]、[お互いに声をかけあって、役割分担を決め迅速に処置をするチームワークの重要性がわかった]、[自分が何をすべきか考えて動かなければならない]、[事後でも振り返ってアセスメント、根拠を考えることが必要である]、[アセスメントポイントを細か

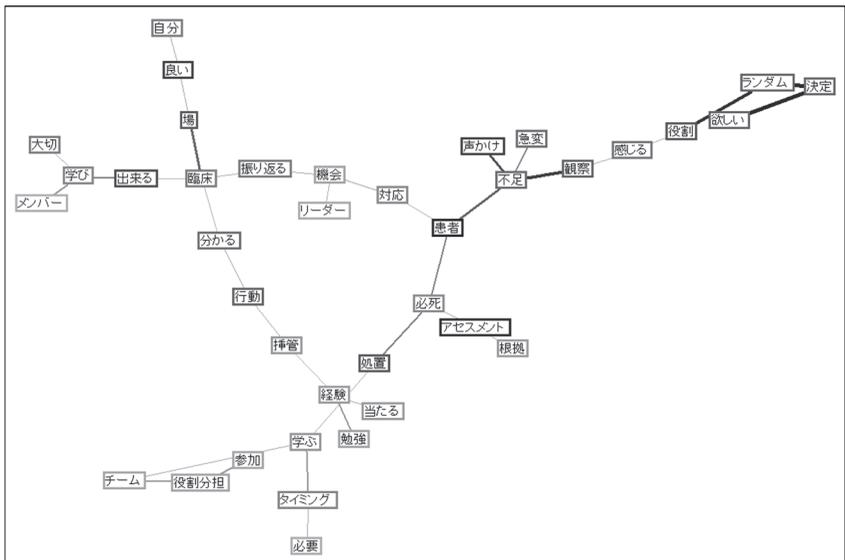


図5 第4回コンセプトマップ

(6) 第6回：慢性疾患(COPD)急性増悪時の徴候・症状のアセスメントとその対応

重要キーワードは、表3のように、「勉強」、「分かり易い」、「アセスメント」、「起こる」、「観察」の順に抽出された。図7のコンセプトマップでは、「観察」というキーワードが、「振り返る」、「起こる」というキーワードのクラスターと結びついていた。これらのキーワードの関連テキストをみると、[介入が先でなぜ行うのかアセスメントを説明できることが大切だと実感した]、[疾患への対応だけでなく起こりうる危険性などを観察するなど一歩進んで考えることができた]、[先輩を見て観察が不足していることを実感した]、[根拠を1つ1つ確認しながら進めてもらったのでよかった]、[少し自信が持てた]、[急性増悪しないように日頃からの観察やアセスメント、対応策を学ぶことができた]などが書かれていた。

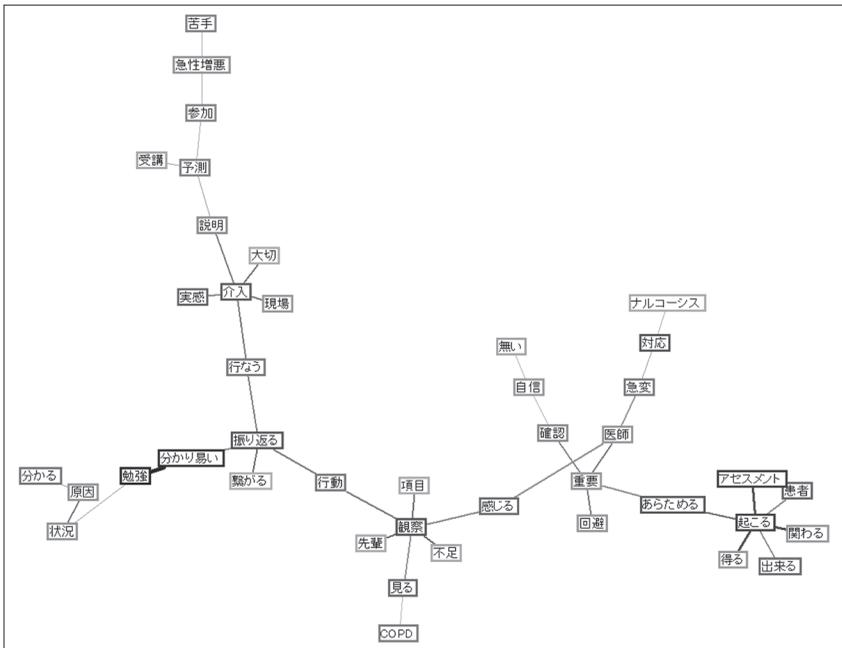


図7 第6回コンセプトマップ

(7) 第7回：創傷(褥瘡)処置、ストマケア、瘻孔管理

重要キーワードは、表3のように、「根拠」、「良い」、「注意点」、「処置」、「装具」の順に抽出された。図8のコンセプトマップでは、「根拠」というキーワードに関するクラスタを中心に、「注意点」、「学ぶ」というキーワードのクラスタと結びついていた。これらのキーワードの関連テキストをみると、[ケア手順や注意点についての根拠、参考書に書いていない内容を説明してもらえた]、[さまざまな装具やアクセサリーの紹介、選択理由、ストマ計測の理由などが学べた]、[日頃何気なくやっていたことがあり、学びなおす機会となった]、[実際の装具を使った内容で分かりやすかった]、[個別性を考えた処置を行う必要があると感じた]などが書かれていた。

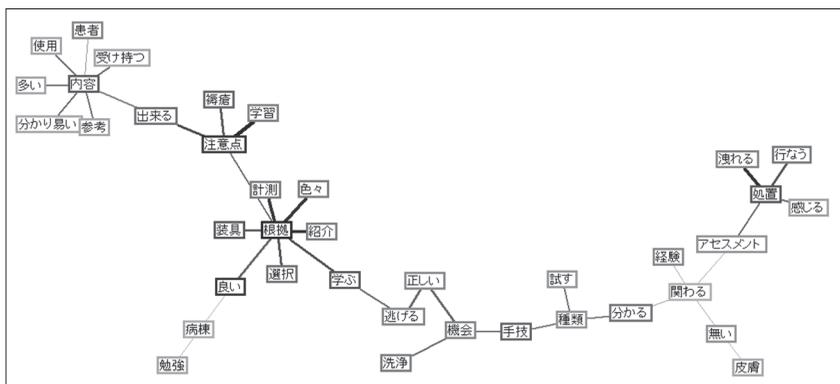


図8 第7回コンセプトマップ

4. 考 察

7回の学習プログラムに参加した卒業生の学習内容について、テキストマイニング手法で作成したコンセプトマップをもとに考察した。

第1～3回は基本となる看護技術、第4～6回は状況設定下での看護技術の応用、第7回は創傷、ストマという専門領域における看護実践力を養うことを目的として、7回の学習プログラムと学習目標を設定した。各回のコンセプトマ

ップをみると、結果3-3)-(1)で抽出された「人工呼吸器」、「挿管」、結果3-3)-(2)の「心電図」、「波形」など、キーワードから直接テーマと結びつくものは少なかった。しかし、そのキーワードの関連テキストをみると、結果3-3)-(2)の「心電図波形の意味がわかった」、結果3-3)-(3)の「CV挿入の手順がわかった」などの記載内容から、各テーマの学習目標に応じた学びとともに、結果3-3)-(3)の「患者への説明にいかす」、[患者の不安や怖さを軽減できる関わりをしたい]、結果3-3)-(7)の「個別性を考えた処置の必要性を感じた」などといった、さまざまな状況において共通する看護職の姿勢、考え方に立ち返る学びをしていたと考えられる。また、結果3-3)-(1)の「一から具体的に教えてもらえた」、結果3-3)-(2)の「今更聞けないことを聞いた」、結果3-3)-(4)の「アセスメントポイントを細かく教えてもらえた」、結果3-3)-(6)の「根拠を1つ1つ確認しながら進めてもらえた」など、結果3-3)-(2)の「現場から離れて学ぶ」という『Skills Lab 研修』が、受講者にとって具体的で基本的な学習機会となったことといえる。結果3-3)-(3)の「臨床では説明を受けながらの介助の見学はなく良い体験ができた」、[何となくわかっていた]、結果3-3)-(7)の「何気なくやっていた」という記載内容から、『Skills Lab 研修』は臨床における学習を補完する位置づけになったといえる。このことから、看護実践力は基礎教育機関と臨床の連携補完の関係のもとで育成が必要であると考えられる。

そして、結果3-3)-(4),(5),(6)から抽出された「アセスメント」、結果3-3)-(6)から抽出された「観察」というキーワードについて、結果3-3)-(4)の「観察やアセスメントが不足していた」、[1つ1つの処置・行動に根拠を持って行う必要がある]、[事後でも振り返ってアセスメント、根拠を考えることが必要である]などという関連テキストは、看護実践の根拠となる専門知識や技術に関する内容である。看護の視点で対象の状態を観察して専門的判断をするためには、知識と実践による積み重ねと裏付けが必要である。これについては、結果3-3)-(2)の「知識と実践の両面から学ぶことができた」、結果3-3)-(6)の「介入のアセスメントを説明できることが大切である」、結果3-3)-(5)の「ただ観察するのではなく、処置による生体反応を理解しておく」、結果3-3)-(4)の「1つ1つの処置、行動に根拠を持って行う必要がある」という内容から、受講したことによりその重要性を再確認していると考えられる。

受講者の中には、結果3-3)-(4)の「2年目で急変には遭遇したことがない」ために参加し、「対応行動がイメージできた」とする受講者がいた。1～2期生は、勤務帯のリーダナースの役割を担うようになっている。その受講者は、結果3-3)-(2)の「リーダとして自分の行動の課題が明らかになった」、結果3-3)-(4)の「リーダとしてシミュレーションに参加し、自分の行動を振り返ることができた」というように、新人、2～3年目を経て、新たにリーダナースとしての役割・責任を意識して受講していた。それにより、自身の実践を振り返り課題を明確にすることができたことは、看護職としての成長を示していると考えられ、成長とともに臨床で担う役割を踏まえた学習意識の違いが垣間見られた。また、結果3-3)-(1)の「慣れた業務で向上心がなかったが意識が変わった」、結果3-3)-(1),(2),(3),(4),(5),(6)の「自分の実践の振り返りができた」というように、『Skills Lab 研修』が受講者に与えたインパクトは、業務の慣れやマニュアル化された看護実践を意識させ、それを変化させる必要性を感じさせるものであったと考えられる。

結果3-3)-(2)の「他グループを見て学べた」、結果3-3)-(3)の「臨床では説明を受けながら介助見学する機会がなく、良い体験ができた」、結果3-3)-(4)の「他のグループの実践を見て自分の行動として考えた」、結果3-3)-(6)の「先輩を見て観察が不足していることを実感した」、結果3-3)-(5)の「卒業生が集まって学ぶと良い刺激を受ける」ということから、他者の行動を見て自分の行動を振り返る機会となっている。臨床では2年目以降一人立ちし、部署内で看護職の先輩の看護実践を見学する機会は少なくなる。そのような中、本研修に参加することで、卒業生が他施設で働く先輩や同級生の行動をみて、先輩をロールモデルとしてとらえたり、自分の行動をより広い視点で見直したり、受講者の向上心を刺激する機会になったと考えられる。これは、臨床では卒業年度(臨床経験年数)別の研修が企画されるが、経験の多寡や卒業年度を限定しない『Skills Lab 研修』の参加形態が、副次的な効果をもたらしたと考えられる。また、学びの中には、各テーマの研修において、結果3-3)-(2)の「患者によりそう看護をしていきたい」という言葉があった。『人によりそう看護』は本学部のカリキュラムポリシーであり、卒業後も看護の基本軸として浸透定着し、そのようにありたいと努めていることがわかる。

シミュレーション教育は、学習者がシミュレーションでの体験とその振り返りで主体的に学習し、自らの成長を感じることを大切にする⁵⁾といわれる。それを実証するのが、結果3-3)-(1)の「[分からない不安が少し緩和した]」、結果3-3)-(6)の「[少し自信が持てた]」などという言葉であろう。結果3-3)-(2)の「[現場から離れたとても良い時間]」として、受講者は学習目標の他に学習において、受講者個々の経験に応じた学びを得たものと考えられる。看護実践力は、確かな知識と技術(テクニカルスキル)を基礎とし、状況に適用するための臨床判断、コミュニケーションスキル、チームワークスキル、専門職としての態度(ノンテクニカルスキル)などの複合的な力である⁶⁾。看護実践力は、これらの要素を1つ1つ技術として習得すれば養われるものではなく、実践の場で統合しながら学び培っていかねばならないものである。しかしながら、臨床では入院患者の重症化、急性化、入院期間の短縮化、医療安全の強化などに伴い、基礎教育における臨床実習でこれらの要素を統合する機会は減少している。さらに、就業後も新人看護職員研修制度による学習プログラムやプリセプターシップなどのサポートシステムが導入されているが、十分に時間をかけて個別の学習ニーズに応えることは厳しく、専門職ゆえに個人の努力に委ねられている。結果3-3)-(2)の「[今更聞けないことや自己学習ではわからなかったことが理解できた]」、結果3-3)-(1)の「[一から具体的に教えてもらった]」、結果3-3)-(4)の「[細かく教えてもらえて発見できることが多かった]」、結果3-3)-(3)の「[何となくわかっていた]」、結果3-3)-(7)の「[何気なくやっていた]」などの内容もそれを物語っている。また、結果3-3)-(1)の「[技術の練習になった]」という記述、表2の第3回以降の受講者数が減少したことから、臨床で経験が少ない専門技術を学ぶことを目的として、参加した受講生が多かったと考えられる。2012年度の研修は、卒業生を対象とした看護技術習得の支援を目的としたため、このような受講動向になったと考えられるが、本格的な研修にむけた課題として、専門技術の学習を通して、さまざまな状況下に対応した看護実践力を養うという目的を受講者に伝え、参加を募ることがあげられる。

結果3-3)-(1)の「[実際の場面ではなくてよかった]」、結果3-3)-(4)の「[2回目のシミュレーションではチームワークを意識してできた]」というように、シミュレーション教育のメリットは、失敗を振り返り、より深く学ぶことである。そ

のためには的確な学習支援が重要である。また、シミュレーション教育では、ノンテクニカルスキルを学ぶことが可能である。結果3-3)-(4)で抽出された「声かけ」、「役割」というキーワードはそれを示している。大学における教育の意義は、学習者の体験に丁寧に対応し看護の意味づけができること、そのテーマの核心となる看護の基本を確認できること、そのテーマの学びを計画的に深化・発展に結びつける支援ができることなどがあげられる。結果3-3)-(1), (2), (3), (4), (5), (6)で「自分の実践の振り返りができた」が多くあげられたことから、自分の看護実践を問い直す機会になったと考えられる。これを機会に、受講した卒業生自身がさらなる看護実践力の向上に結びつけていくことを期待したい。付属病院を持たない本学で実施する『Skills Lab 研修』の価値は、就業施設の違いに帰せずして、これらの意義において卒業生の看護実践力の育成を支援できるところに見出すことができるだろう。結果3-3)-(6)の「先輩を見て観察が不足していることを実感した」、結果3-3)-(5)の「卒業生が集まって学ぶと良い刺激を受ける」、結果3-3)-(4)の「アセスメントポイントを細かく教えてもらえた」、[根拠を1つ1つ確認しながら進めてもらえた]ということから、卒業生の看護実践力を育む現任教育を大学が担う意義が読み取れる。

今回の研究では、①テーマごとの学びとともに看護職の基本的な姿勢、考え方に立ち返る学習機会となったこと、②看護実践の根拠となる専門知識や技術を駆使するアセスメントや観察の重要性について再確認したこと、③経験を経ることにより所属部署で担う役割が変化し、研修への参加意識が異なること、④先輩の行動を見て学ぶ機会となったこと、⑤本学部のカリキュラムポリシーである『人によりそう看護』が基本軸となって看護実践を行っていること、⑥卒業年度や経験に応じた受講者個々が学びを得たこと、⑦研修での学びにより自分の実践を振り返る機会となったことが、2012年度開催した『Skills Lab 研修』の7回の学習プログラムに参加した卒業生の学びであることが明らかになった。また、本研修の根幹的な目的はさまざまな状況下に対応できる看護実践力の育成であることを、受講者に伝えることが課題であることがわかった。

5. まとめ

本研究は、2012年度開催した『Skills Lab 研修』の7回の学習プログラムに参加した卒業生の学びについて、自由記載による質問紙法を用いて調査し、テキストマイニング手法で分析した。その結果、テーマごとの具体的な学びから看護実践の基本に立ち返り、自分の実践を振り返る機会となったこと、看護の専門性が問われるアセスメントや観察の重要性を再確認し、所属部署で担う役割が変化による研修への参加意識が異なったり、先輩の行動を見て学ぶ機会となったり、受講者個々が学びを得たこと、さらに『人によりそう看護』を基本軸として看護実践を行っていることが明らかになった。この研修開催において、卒業生の学習ニーズを調査し、7回の学習プログラムを決定した。しかしながら、付属病院を持たない本学部のような大学が開催する現任教育プログラムやシミュレーション教育は、未だ体系的な方法論が示されるまでに至っていない。このような中で、計画的な現任教育として初めての取り組みであり、担当教員グループの試行錯誤の結果として、各回の学習指導案を作成し開催した。本研究の結果から、その取り組みの効果、評価が明らかになった。今後はこれらの結果を踏まえ、卒業生の学習力に応えられる事業として、その本格化に向けて学習の目的を明示し、その学習プログラムや方法などについて精選することを課題として取り組む。

引用文献

- 1) 奈良信雄：第9回日本M&S医学教育研究会学術大会，第6回医療教育スキルズラボ研究会抄録集，第9回日本M&S医学教育研究会学術大会，第6回医療教育スキルズラボ研究会，2012年。
- 2) 大屋祐輔：第1回National SUN Meeting 抄録集，SUN SIMULATION user NETWORK，2013年。
- 3) 辻野美帆他：新研修医オリエンテーションへの高齢者・障害者疑似体験の導入，日本シミュレーション医療教育学会雑誌，Vol.1，2013年。
- 4) 井部俊子他編：人材の育成と活用，看護における人的資源活用論第3版，日本看護協会出版会，2012年。

- 5) 阿部幸恵：看護のためのシミュレーション教育 初めの一歩ワークブック，日本看護協会出版会，第1版，p.iii，2013年.
- 6) 小西美和子：学生の学びをつないでいくためのシミュレーション教育の位置づけ，看護教育，54(5)，pp.354-359，2013年.